

停滞と混乱を経て

——戦後帝大新聞史(4)——

河 内 光 治

昭和六十一年八月十九日受理

【要旨】昭和二十二年の秋は、国鉄運賃、郵便、電気、新聞、酒、たばこ等々の値上げによる生活の危機と片山内閣の指導力不足による政情不安のため、世情は著しく沈滞し、人心は無気力に陥っていた。編集部も、職人的技術の限界に突き当たり、実体の把握できない民主革命の空疎な幻影に戸惑い、出口を探し出せないもどかしさに悩まされなければならなかった。それでも、悪化する用紙事情、高騰する印刷費の中で、『季刊大学』は十一月に第3・4合併号、二十三年三月に第5号を発行した。二月に片山内閣は総辞職し、再び激動の政治的季節に向かうことを予感させる。編集部も、新しい政治意識の連帯を自覚すること、漸くこの虚無からの脱出を図ろうとして、昭和二十二年度は終わる。

昭和二十二年十月—二十三年三月(104号—106号)

概 観

編集部員で九月末に卒業した者は、工・高橋豊、それに四月に一線を退いた宮本と太田である。高橋は専攻を生かして日本船舶運営会に、高文をパスした宮本は上級公務員として農林省に入り、太田は田坂内科の医局に残った。五月に入社した第二期生の中では、萩原と巽が、夏休み明けとともに出て来なくなり、新人は横須賀線の鎌倉と逗子に住

んでいた木村と山本だけになるが、二人は仕事にも馴れ、貴重な戦力に育っていく。この二人は連れ立つと、太いのと細いのと対照の妙があり、仲尾が命名して湘南海岸の Dabo Haze と呼ばれることになる。片山首相は、十一月四日、平野力三農相を罷免し、国会は十一月二十日から炭鉱国家管理法案をめぐる大混乱し、社会党内の左右対立は激化して片山内閣は昭和二十三年二月十日に総辞職する。これを承けて、二月二十一日に衆議院は芦田均を首相に指名するが、参議院は吉田茂を指名。紛糾の後、民主・社会・国民協同三党連立による芦田内閣が成立したのは三月十日で、文相には社会党の森戸辰男が留任した。

編集部も、四月からの理想を追求しようとした情熱が漸く色褪せ、物

価高に直撃された生活の不安から、無気力で惰性的な生活に押し流されてしまいそうになり、意思的に立ち上がって、この頹廢と虚無に対して執拗に闘わなければならなかった。仲尾は来年三月に卒業できる単位を取ったのであるが、このままの状況で新聞を立ち去ることに大きな躊躇いを感じ悩んでいた。再び政治的季節へ、その危機感がもう一度、全員の連帯意識を駆り立てることになる。仲尾は一年留年を決め、二期生全員は木村・山本を加えた態勢で、昭和二十三年度を迎えることになる。

ところが、この三月の年度末の休みを利用して、河内、川上、田辺の三名が結託して関西方面に無断で出奔するという事件を起こす。編集部許可を受けていなかったのも、残された者は多大の被害を受けたが、長谷川の図らいにより、関西方面の取材と原稿依頼のための出張という事になり、一週間後に、三人は意気揚々(?)と復帰する。はた迷惑な無謀な行動であったが、沈滞感がふつきれ、活力が甦ったと言うのに、青山は「誰だってそうしたいのさ」と冷静であった。ただ、法隆寺前の売店で買った地方新聞が、ベルリン封鎖をめぐっての米ソ対立を、「第三次世界大戦勃発」とセンセショナルに報じていたのが忘れ難い。

【季刊大学】 十一月二十日に3・4合併の秋季特大号(B5判一八二頁・七〇円)、三月五日に第5号(B5判一四二頁・六〇円)が発行された。3・4号、5号とも、表紙の右縦三分の二の地紋がくすんだ茶系統と

なる。題字は、3・4号が赤、5号が緑色である。広告は、表紙の裏二頁、目次の裏一頁、巻末に二頁、その他本文中にもあり、取扱いい店として「学生書房内フタバ広告社」の名前が出ている。装釘は両号とも鈴木進で、カット陣は、3・4号Ⅱ小磯良平、須田剋太、高木四郎、藤尾龍四郎、花森安治、山本洋、辰野宗一、古茂田守介、5号Ⅱ藤尾、須田、三輪福松、である。

第3・4号には「巻頭言」がある。

敗戦の現実が今我々の眼前に大きく展げられている。その裡にあって、一步前進、二歩退却しつつ民主革命が遂行されようとしている。その途は余りに峻しく時には絶望感に襲われつつも而もなお民衆の惨めな生活の裡から足音が聞こえて来る。それは若い世代の新しい人間像の足音となつて聞えて来る。

耳をそばだてて皆で静かに聞いてみたまえ。それはこゝ一年前に聞いた急激な足音ではないかも知れない。然しなお絶えまなくはこぼれる逞しい足音である。歴史を創る民衆の足音である。

と書き出され、「本年初頭以来重苦しい虚脱がこの知識層の中に漂いつゝあることは否定出来ない」と落ち込み、「我々は歴史を創る新しい人間像たあらねばならないのである」と、「逞しい民衆」と対比して絶望的な覚悟を表明し終わっている。昭和二十二年秋の停滞した社会情勢の雰囲気と、自己閉鎖的な方向に進みかけていた編集部の心的風景を示していると言えようか。

編集後記は（I・N）と署名があり、

我々も創刊以来、資材、印刷費の急激な高騰と、編集上の悪条件下に悪戦苦闘しながら、若い世代の学問、文化への逞しい前進の志向を表白しようと努力しているが、矢張り出来上った雑誌を前にしては己の力の足りなさを泌々と痛感させられる。と嘆き節を連ねている。

特集は、「文化革命論」と「国語国字問題」の二つ。座談会は「近代の大学を語る」、そして、講座に膠質学、論文に人口問題、都市計画、近代数学、量子論、等の自然科学系のものを載せているのが大きな特色である。1、2号の経済学偏重という批判に、学術誌として応えようとしたものである。

第5号の「巻頭言」は一九四八年一月と記され、現実を「泥沼のような頽廃と暗鬱な低迷をはらんだ儘」と捉え、「インフレの破局的進行と小市民層の崩壊はようやく構造的矛盾を露呈し、文化はやゝともすれば非近代的原始生活の環境の中に置き去りをくう実情にある」とし、「文化反動は更に跳梁をきわめるであらう」と予測し、それに対する「闘いは凜烈でなければならない」と宣言し、

廿世紀は民衆の世紀である。併し終焉する前半世紀は、民衆の意志に反して民衆を犠牲とし煉獄におとし入れる世紀であった。我々は呪多い前半世紀に訣別する。もっと光を、そしてその光は民衆自らによってともされなければならない。

停滞と混迷を経て（河内光治）

と結んでいる。前号から続く「民衆」という語にひっかかるが、昭和二十三年を迎えて、日本全体に或る変化が生まれて来つつあったことを証している。激動の予兆を察知していると言えようか。編集後記（H）にも、

インフレの昂進と国際経済への参加の希望の双極の中にあつて日本の再建の具体的な姿は、一体どんな形で模索されつゝあるか、事実は困難な見透しの前にたつての困迷が見られるのではなからうか。文化国家として再建される日本の具体的プランは、呼びかわされ要請された「平和革命」のかけ声にかかわらず、肉づけを欠いた空疎なお念仏に過ぎない点が反省させられる。

と書かれてある。なお、続く「出版部から」（S）の中に、学術文化雑誌として隔月刊にすべく、用紙割当委員会に特別の御配慮を願うべく申請を行っている。幸にして許可あり次第、四月の新春を期して隔月刊にしたいと思っている。と書かれている。

特集は「平和革命の具体的構想」、「世界復興一カ年の回顧」の二つ、座談会は「近代理論経済学とマルクス経済学」という意欲的なもので、これについては「編集後記」で、

これは京都で行われた人文科学経済学大会の直後出席した東西の理論経済学陣営とマルクス経済学陣営の権威をすぐって西宮市の学生図書協会兵庫支部で、夜を明かして前後六時間にわたって行

われた座談会の記録であり、と書かれている。

その他、当時問題となっていた「X線照射による稲増収の実験について」の討論会、「地方文化運動ルポルタージュ」、「登呂発掘の成果報告」などが目に付く。総じて、編集部自信に満ちた意欲的な編集といえようか。

【発行日・頁数】 前期と同じく木曜日発行で、年内は、十一月二十七日の10491050号を除き二頁で、一月一日の10541055号、一月十五日の10561057号が四頁、その後の一月二十二日の1058号から三月十八日の1066号まで二頁である。用紙割当委員会への報告の関係から、四頁号は合併号となっている。なお一月十五日の10561057号に(1)「社告」があり、「日刊紙の十七段に対応、本紙でも本号から一頁十七段制をとりました」とある。

【購読料】 十月九日の1043号に(1)「社告」があり、「本号から二頁一部一円五十銭、四頁一部三円」の値上げとなる。継続購読料は「一カ年八十円、半カ年四十円(送料共)」である。

【広告】 前期の1039号からの、下二段の十四割りに一段の記事中一つ、二段の突き出しが、一面は十四割りの大きさで四つ、二面は十割りの大きさで二つ、が常型である。下二段は六割りの時もあり、10491050号では一、二面が三段の十二割り、三面が二段の十四割りの上に一段の七割りという横の広告が入っている。そして段数の増加に伴い、1058号1059号の一面では、下二段十四割りの上に、左右の突き出しの間に一

段の横五割りが入り、1060号の一面からは、二段十四割りの上に一段七割りの三段、が常型となる。書籍が始どであるが、記事の中に、カメラ、予備校、薬品、デパートも時々入っている。1062号の二面は下二段十割りの薬の広告である。

【本社関係】 1043号一面に(1)「社告」がある。

九月廿日付の政令により東京帝国大学が東京大学と改称することになったので本社名も東京大学新聞社と改め本紙は本号から東京大学新聞と呼ぶことにいたします。

というもので、紙名の銅版も、「帝国」が「東京」に改められている。これは、原図を長谷川が直した。

10491050号にも(1)「社告」があるが、「最近小社編集員と称して関東関西の各地に出没、金品を強要する者がある由ですが」と、賈物への警告である。10561057号三面に横(2)「大学新聞・帝国大学新聞、合本出来」のボックス記事がある。大学新聞(20・4・21・4)二百円、帝大新聞(21・5・22・4)二百五十円である。

【出版部】 1048号に「季刊大学3・4合併号、十一月廿日発売」がある。主要目次が載せてあり、上横に「読んで読ませて次々に」と標語が入っている。10491050号二面にも「出版部新刊案内」があり、(重版)「日本封建制の分析」、(重版)「帝大入試案内」、「季刊大学三・四合併秋季特大号」が発売中で、近刊として、「灰色の青春、学生社会運動史の側面」(B6判一八〇頁・四五円・一〇〇円)が載っている。10561057号一面にも

(重版)「大学入試案内、附昭和廿一年各大学入試問題、昭和廿二年度東大入試問題」、1058号にも「灰色の青春、1月25日発売」がある。以上いずれも二段ボックスである。又、1049 1050号三面に(1)「謹告」があり、再版「日本封建制の分析」に印刷の手違いがあるので、一頁の別刷を用意し本社が学生書房で御渡しします、とある。

1062号の一面に「国立大学入試案内」二十三年度版(B6・三一八頁・定価九〇円・二〇円)二月廿六日発売、二面に「季刊大学第五号」(B5版・一五五頁・六〇円・二二円)三月十五日発売、があり、目次が載せてある。1065号も一面に、「国立大学入試案内」と「季刊大学第五号」の案内、二面に、南原繁著「人間革命」(B6版一九二頁、予価六〇円・一〇円)三月下旬発売、が二段ボックスであるが、1066号に一段の「社告」で「永らくお待ちせしました、季刊大学第五号発売になります」とあり、「訂正」として「人間革命」の定価を六五円に、四月上旬発売予定、に直している。

【論 説】

1042号は「卒業生諸君を送る」である。新卒業生を「内職」に狂奔した世代と捉え、今まで外にあって批判して来たことを、今度は自らの問題として自らの行動を以て解答を与えねばならぬとする。そして今の時期を、「地味な動き」の「嵐の前の静けさに似たもの」で、平和的民主主義革命の「実質的な各論の段階に達した」として、「人民の中へ」でなく、「人民と共に」問題の解決に進め、と説いている。

1043号・援護会と育英会、1044号・新聞研究所と学内新聞、1045号・再び

停滞と混迷を経て(河内光治)

生活の危機について、1046号・新大学制審議公開について、1047号・協組運動の方向、1048号・自治運動への反省、1049 1050号・文化発表会と文化会の性格、1051号・国立大学学生自治連の結成について、1052号・最近の自治運動、1053号・総合研究会の成果について、1054 1055号は休載、1056 1057号・一九四八年の課題、これは大学は「民衆の大学」であらねばならぬと書き起こし、その前に横たわる困難を挙げ、「要するに今年は多難である。しかも暗中^(マヤ)茂さく^(マヤ)の年であるかもしれない」と結んでいる。昭和二十三年は暗い予感とともに始まる。

1058号・研究難の打開、1059号・授業料引上と学生の立場、1060号・文教の危機と関東学生大会、1061号・学生生活問題の認識、1062号・学生と政治、1063号・人事の民主化、1064号・日本学術会議とその選挙方式、1065号・自治運動一年、1066号・文相に望む、である。

【主観客観】

仲尾の執筆で横組みが続く。1042号は卒業証書の字句の移り変わり、1043号は講義メモを忘れたまま政治学史の講義を続けた南原総長と、それを受講した藤田晴子さんの感想で、二人の顔写真が入っている。

1044号はユネスコ、1045号は総長選挙、1046号は公開講座の聴講者の分析、1047号はベニシリンとストレプトマイシン、1048号は滝川部長による京大法学部の新建、1049 1050号は南原総長の学寮建設計画、1051号は一高の世論調査と学生の出欠の問題、1052号は風景次郎が北大新聞に書いた「四十度圏の幻想」について、1053号は高校長会議のシニア案と四年制一貫

の大学案の比較、1054 1055号は欠、1056 1057号は経済学部ゼミの読書調査、1058号は日本の近代とは、1059号は近來の不祥事としての志村事件、1060号は適審委の大河内委員の弁明、1061号は名誉教授の発令、1062号は大講堂あれこれ、1063号はロスアンゼルス大総長から南原総長への贈りもの、1064号は六大学リーグ、1065号は学部の自治と中央集権、1066号は厚生部の仕事への要望、について書かれてある。

【おちば】

1043号は正門前某古書店主人の話す最近の学生気質、1044、1045、1046号はなく、1047号はアーケードに貼られた文学友会の壁新聞、1048号は戸田さんの定年退官記念会、1049 1050号は文化発表会の不評判、1051号は休み、1052号は育英資金の使い道あれこれ、1053号は電力不足解消のため武蔵野市で学生が生協のおばさん達と協力して電力協議会を作ったという話、1054 1055号は欠、1056 1057号はバッジの候補作に二工・星野教授が手を入れたので当選した時の賞金は？ 1058号は学寮建設資金に既に三千件の申し込み、1059号は法・アーケードに昨年度の先輩の成績と就職先を貼り出したら大人気、1061号は東大細胞と新人会の対立に加藤学生課長の不意な発言が一石を投じたというややこしい話、1062号は学内の盗難のあれこれ、1063号は掲示権が学生に委せられたがそれをめぐっての学内団体間のごたごた、1064号は欠、1065号は学年末試験の大内教授と舞出教授の問題、1066号は喜ばれている全学座(廿五番教室)の音楽会は出演料のため赤字が相場となっているという話、である。

【音叉】

1043号の「カンニングについて、東大先輩・稲田」は、1040

号の論説「不正行為と試験制度」に対する反駁で、不正行為の横行から試験制度の改革へと進んだ論説の主旨に対し、その風潮が問題なのであり、自ら思索し批判し認識する渴望にもえた大学生活を過して来てほしい」としている。同号にはもう一つ「悲運の対早大戦、学生部・神田順治」がある。これは明らかに誤審による敗戦であるのに一般紙はこれを無視しているとし、敗戦にも勝利以上の美しさのあることを忘れず」と東大ナインのスポーツマンシップを讃えたものである。

1049 1050号には「学術体制歴研案について、歴研会員・倉橋文雄、松島栄一」がある。これは、1047号の記事に対して「趣旨を誤解させるおそれがある」ための補足説明である。記事は「続々と新体制案」として五案を紹介しているので、歴研案についても九行しか費やしていない。「音叉」は六十三行に及ぶ。また、この号にももう一つ「永井国夫君の死について、緑会委員・荒尾正浩」があるが、これも、一般紙が「不義の邪恋を精算する為、遂に心中するに至ったと報道」した友人の死の真相を訴えたものである。

1051号の「文化会の立場、文化会常任委員会」も、1050号の論説「文化発表会と文化会の性格」に対する反論を含めた補足説明である。この後、X線による稲増収についての投稿が二つあるが、これはその項で触れる。

1061号に「経懇談会に出て、経・山田章」があり、出席した教授、特に大内教授の発言に失望したとあるが、これに対し1062号に「経・懇談

会に出て、大内兵衛」がある。山田君の誤解であると発言の主旨を説明している。1063号には「大学の門」を見て、文・島村聡」があり、内容の愚劣さもさることながら、この批評を懸賞金つきで東大文化会が募集している事実を非難している。これに対し1064号に「島村君に答う、文化会・小松甲子夫」がある。また、同号には「野球連盟について、元東大野球部マネージャー・長塚隆二」があるが、東大神田理事が六大学連盟を辞めたことについて一般紙の報道への批判である。

【講座・講演】

1042号に(3)「秋と共に公開講座華か、伝研、東文研、社会思想研など」があり、(1)「東洋文化研講座」、伝研の(1)「本学公開講座、第十二回微生物学」、東方文化学院の(1)「東方文化講座」、(1)「社会思想研公開講座、現代世界思潮講座」が紹介されている。学内の公開講座は、1043号に、総合研究会の第十三回が一段ボックスで(1)「社会科学講座」、経済学部の第十四回が(1)「若い公開講座」、1044号に(1)「経・教授ら、秋田で公開講座」、1045号に(1)「第十五回農公開講座」、1046号に第十六回(1)「外国文学講座」、(1)「法学部公開講座」と紹介されている。また、同号には(2)「勤労者は二八%、欠席者の多い東大公開講座」という記事がある。これは学務掛に集まった報告の中から、三、四、五、六、八回の実績を纏めたもので、聴講者の職業別、学歴別、性別、年齢別の集計であるが、全体の六割は学生である。そして第六回の実際出席率が出ているが、それは僅か四四%となっている。

その他、1042号に(1)「国語学会公開講演会」、1043号に(1)「振動測定」講

座ひらく」、1044号に太平洋文化協会の(1)「現代アメリカ政治と経済」講座」、1045号に(1)「学士会講演会」、1066号に(1)「国際法学会五十周年記念総会」がある。

【その他】

研究所紹介は、1045号に輿論調査研究所、1047号に染色体研究所、1049号に統計数理研究所、1051号に総合試験所、1052号に世界経済研究所、がある。1061号に二段ボックスで「学内研究・文化団体紹介」①として、結核研究会が取り上げられているが、その後はない。「趣味と専攻」は引き続き、1051号、1054号を除き、毎回四名ずつ掲載されているが、1059号を最後にして姿を消す。研究助成金はこの期にはない。1065号から「学寮建設寄付者」が掲載されている。

【企画もの】 学生論文

前期から始められたルポルタージュは、1042号②「転換期の協組運動、各校の連絡が急務、全国学校協組連・阿部陽三」、1044号③「水害診療班に参加して、机上計画と実際とのギャップ、東大医・清寺」と編集部員のが続き、1045号④「要保護者の実態調査(上)、文化と無縁の生活、学生生活協議会女子部」、1046号⑤(下)、政治への無関心、同」で完結する。

そしてそれに続いて(1)「先輩ルポ募集」が載っている。『今年度卒業生の職場報告ないし感想』、『一六〇〇字以内、十一月十五日締切』である。これは、1049号から「先輩ルポルタージュ」として連載される。①は「文部省から、民主化運動に期待、温情主義の正体、相川順吉」である。相川順吉とは、佐渡出身の加藤がこの後も用いているペンネー

ムである。1051号②「統制団体から、寄生的な労働組合、静かな職場の一例、水本宏」、1053号③「インスタンから、牢固たる封建性、山田良雄」で終了となる。

その他、1060号「縁故と金の下宿、本郷付近玄人下宿の実態、東大法律相談所調査係・山本卓」、1062号「女子学生の立場から、深い友情を見出せ、大半はやっばり自力で稼ぐ、江口裕子」、1063号「軍学徒の立場から、『論理以前』の脱皮、未だ根強い軍教育の残滓、藤原彰」、1064号「特研生の立場から、相つぐ脱落者、学資は生活保障でなくてよいか、谷田沢道彦」、そして1065号に、「シベリアからの三つの手紙、観念の迷宮を出て、山辺啓」がある。

わが師わが友 前期からの続きである。通し番号は一つずつ増える。

⑧ 1042号、二工・瀬藤象二教授「アルマイトの権威、串本節とお汁粉が大好物、星合正治」、行木正義画く。

⑨ 1044号、経・矢内原忠雄教授「階段に立つ求道者、」要談は五分間以内に、楊井克己」、行木画伯画く。

⑩ 1045号、法・我妻栄教授「才と良識と努力の人、」印度洋上にコイを釣る」、菊井維大」、行木画伯画く。

⑪ 1046号、農・藪田貞次郎教授「学究と実験に終始、エジンバラでガラス細工、住木諭介」、橋尾画伯描く。

⑫ 1048号、医・田宮猛雄教授「すぐれた記憶力、豊川行平」、B・C・G反対の闘将、今村荒男」、鈴木新夫画く。

⑬ 1049号、経・大内兵衛教授「明確積極的な所論、驚くべき学問への情熱、宇野弘蔵」、「先生に献上した絵、内田巖」、同画伯画く。

⑭ 1051号、二工・井口常雄教授「天稟の楽天家、親譲りの学と酒、瀬藤象二」、石河光哉画伯描く。

⑮ 1052号、農・田中丑男教授「はらげいのひと、大学への無私の純情、大久保義夫」、石河光哉画伯描く。

⑯ 1053号、理・岡田要教授「後味を残さぬ人徳、内緒話の出来ぬ声、篠遠喜人」、鈴木新夫画伯描く。

⑰ 1056号、文・高木貞二教授「長者の風、動物心理学会の会長、相良守次」、須田剋太画。

⑱ 1059号、二工・竹中二郎教授「枯淡な高僧の風貌、テニスと魚釣りに妙技、兼重寛九郎」、西尾善積画伯画く。

㉔ 1061号、法・高木八尺教授「勇敢なクエーカー、煙草一服が唯一の道楽、松本重治」、須田剋太描く。

記事

【学内】 先ず全学的な行事。1042号のトップは、(3)「72回卒業式、色づくいちようの下、新鋭二千晴の門出、」人間革命」の決意も新」である。一段半二行に組まれた記事の全文を載せてみよう。敗戦後二年を経て、漸く平静を取り戻した当時の雰囲気が見られる。

くりあげ措置令による最後の「帝大」卒業生を送り出す第七十二回東大卒業式は去月廿日午前十時から大講堂で行われ、自由参加の父兄八百余名も参列、まれにみる盛大な雰囲気盛り上げていった

当日の卒業生は法四五七、医二五七、一工四〇八、文一三一、理一六三、農一七三、経三五九、二工三六九、計二二一七名で、式は先ずブラームスの「大学祝典序曲」の奏楽に始まり、南原総長から各学部総代に卒業証書を授与、終って別項の如く「人間革命と第二産業革命」を主題とする告示を行い人間の解放を強調、これに対し卒業生総代、医・医学科宮川清君から歴史の内容を豊富ならしめ、人間性を深刻に実らす強じんな文化を建設する旨の力強い答辞があった

再び奏楽に移り学生歌せい唱、ほたるの光のコーラスにおくられ式を終ったが、式後は運動場にうつらえられた各学部毎のテントに、教授、学生、父兄相会してビールとオデンに惜別のひとときを意義深く送り例年にないうちとけた大学をあげての卒業式風景を現出した

なお式後総長と父兄学生との個別面接が総長室上で行われはるばる遠路上京した父兄が晴れの卒業証書を手にする学生に導かれて気軽に応対する南原総長から新しい門出を激励され、一人息子でございます“”蛍の光を聞いたときはうれし涙が出ました“などと、

停滞と混乱を経て（河内光治）

常に変らぬ「卒業」にまつわる感慨と決意が、この日国旗はためく大学の緑の中にしっくりととけ込んでいった

記事は(1)「送別会いろいろ」、(1)「医学部送別会」と続き、横二段の「卒業式場」、縦三段の「式後運動場での惜別風景」の写真が添えられている。その横に(2)「毎週木曜、総長と学生の面会日」がある。

1045号のトップは、横(5)「終戦を促す“大学の理性”、南原・高木・田中ら7教授」という三段の囲み記事である。(H)の署名があるから、長谷川のスクープである。東京裁判の木戸口供書から洩れた事実として、二十年三月に末弘教授に代わって法学部長に就任した南原教授が、法学部の高木、田中教授ら七教授の同志と、終戦処理について協議進言したというもので、(1)「七教授の場合」としてあるが、具体的な細部については触れられていない。ニュース・ソースの南原総長がその詳細を語らなかったためと思われるが、個人的に長谷川は、南原総長の信任が篤かった。後年、彼の鷗外五部作完成の出版記念会には南原氏も出席して、周囲を驚かせたという事実もある。記事は三教授の顔写真を入れ、明治三十年代の日露戦役の開戦・講和をめぐる(1)「七博士事件」の顛末も伝えている。

1046号に「卒業生就職状況」がある。(3)「決定はほど九割、文に多い大学院残留」と、医を除き各学部の状況が伝えられている。続いて(1)「未だ除籍者なし」、卒業生授業料怠納者」というのがある。九月末現在、法三十四名を筆頭に七十名になるが、まだ除籍された者はいないとの

109
こと。文学部は皆無とある。

1047号のトップに横「学寮建設促進会が発足」がある。(3)「明春五百名収容へ、一千万円を募集」で、「去月三十日の学寮建設促進会の打合せ会」の写真が二段で添えられ、(3)平均は一九一六円、学寮学生の生活費調査」が続く、「文・直井君談」がついている。直井君は、「住居の問題は全く緊急」なので、「父兄、学生の負担にならぬこと、出資を理由に大学への干渉が起らぬことを条件として賛成すると言っている。その後、1051号に四段ボックスで(2)「焼け出されの乏しきに捧ぐ」、学寮建設に寄す医・緒方章教授」がある。来春定年退官のため門下生が寄付金を集め贈ったところ、「戦災で一物もなく焼け出された教授は僅に畳だけをそれで補修することにして」残りは寄付を申し出たという「美談」で、一旦は断った南原総長も結局これを受け、寄付第一号となったという。新年の1056号に(2)「学寮建設募金運動、少くも一千万円、三月末迄を目標に」があり、募集要項が詳しく載せてある。(1)「新卒業生から申込」が続く、これを機に「卒業生と母校との関係が密接になるものと期待されている」と書かれている。然し卒業生中心の募集では目標額に達しそうもないと、1062号に四段ボックスで(2)「貧者の一燈もある、予定に満たぬ学寮資金」と出ている。「14日現在399,136円」である。そして1065号から(1)「学寮建設寄付者」が連載される。1066号に(1)「第二回学寮建設委員会」があり、三月末締切を六月末に延期し、目標を二千万円に引き上げたことになったと報じている。同号には(1)「古

在会館資金学寮へ」もある。

1044号に(3)「11月23・24日、秋の「文化発表会」、1048号に(3)「賑やかな秋の催し、11月22・23日、文化発表会プログラム成る」がある。

この「発表会」は今年最初の試みであるが、五月祭の学内公開は「大学」の施設の公開に留るので、もっとじかに東大生の思想と生活を発表する機会をもちたいという文化諸団体の希望が実現したものである

というもので、「学外者のために四千枚(一枚十円)の入場券が発行される」とあり、展示、研究発表会、アトラクションと内容が紹介されている。1049号は、長唄演奏と総長挨拶の二枚の写真を入れ、(1)「文化発表会賑う」と報じているが(もともと総長の写真は次の1051号で緑会大会のものと訂正されている)、しかし、会の性格の曖昧さ、運営の不手際もあり、本学学生より女子高専生が押し寄せるといふ思わしくない結果について、同号の論説は「文化発表会と文化会の性格」と題して論評を加えている。

1044号に(1)「学歌バジの募集終る」とあり、1051号に横「われ等の東大(1)学生歌、応援歌当撰決る」がある。結果は学歌に入選作はなく、第二回学生歌(法・今川忠雄)と第一回応援歌(法・大森幸男)の当選作は別に二段ボックスで組まれ、(1)「応援歌について、中村草田男」、(1)「学歌について、阪本越郎」の選評が付けられている。そして、(1)「当選歌作曲募集規定決る」が続いている。1060号に(1)「学生歌応援歌、締

切迫る」と作曲募集の二月末が迫ったことを報じ、応募規定、学生歌、応援歌の歌詞が再掲されている。

バッジについては1056号の「おちば」に、「旧ろう佳作四篇が決った本学バッジ、その中最高点二篇を目下さる名匠の手で彫刻中で近く試作品が出来る」とあり、もう一点に二工星野教授が手を入れて「グンとよくなった」と書かれているが、1059号の「学内ニュース」に三点の写真が紹介されている。そして1062号に「東大バッジ、再試作してきめる」とあり、星野教授が手をいれたのもう一つのが、世論調査の結果伯仲なので、再試作することになったと伝えている。

研究所関係。1044号のトップは、(4)「新聞研究所、法制的に行悩み」で、(3)「補正案を提示(文部省)、問題となった「教育」と記事が続いている。これは、新聞研の発足が決まり、本学予算も組まれ、新聞連盟から十二万円の寄附も決まる等期待が寄せられているが、肝腎の官制が公布されない。これは、研究所としては例を見ない「教育をつかさどる」という原案に法制局が難色を示しているためで、法制局次長、文部省科学教育局長、東大事務局長の談話が添えられている。続いて、(2)「新聞科設立華か、慶応・東北大・日大など数校」の記事があり、日大、東北大、明大、慶応、が取り上げられている。論説も「新聞研究所と学内新聞」で、新聞研究所がその性質上、教育面を担当することを是とした上で、学内新聞を実習用として吸収しようとする傾向に対して警告を発する。

停滞と混迷を経て(河内光治)

云うまでもなく各校の学生新聞は、概ねその校内新聞としての特色を持つが、その最も特徴的な、誇るべき性質は、それが単に校内新聞たるのみでなく、広く学生運動の一環を担う、いなむしろその母体となるべき推進体でなければならないということであろう。(中略)真理に対してまげることのない良心と進歩性、学校当局にも非があれば糾弾しても止まない激しい正義感、これらに貫(貫)ぬかれていなければ学園新聞はその意義を失うと極言してもよい。

と断じ、今春の早稲田、慶応の例を挙げ、学園新聞の自主性を強調している。時代の一つの流れとしての反動化の兆しを、編集部は自身の運命として実感していたと言っているであろう。

1046号に(1)「東研所長、辻直四郎氏に決定」がある。戸田前所長の定年退官に伴う人事である。本社理事長戸田教授の退官については、1047号に(1)「本日戸田博士の退官記念会」とあり、1048号の「学内ニュース」に一段の会場の写真を入れその報告がある。1049号にも(1)「戸田博士還歴祝賀会」がある。

1048号のトップに(3)「研究体制新予算を見る」という文部省からの記事があるが、(3)「東研、社研を拡充、遺伝研究所・国語研究所など新設へ」が総見出しで、記事は(2)「東方文化学院を合併、東洋文化研」、(1)「社研、新たに五部門」、(1)「遺伝学研究所」、(1)「国語研究所」と続いている。東洋文化研が外務省所管の東方文化学院を合併することに決

まったというもので、辻所長の談話、東方文化学院の紹介が添えられている。調査では、1043号に(1)「社研・労働調査の研究」、1066号に東洋文化研の(1)「農地改革調査」がある。

1051号のトップに(3)「本学にも電力危機、半身不随の理系学部、理学部では対策委員会」がある。電力危機で、昼間週三日停電という措置が取られたための対応で、理学部、医学部・病院、総合研究所、図書館が取り上げられている。このうち図書館だけは夜九時までの時間延長である。

一月一日の10541055号の三面は(4)「1947大学一年の回顧と展望」の特集で、カットに三段の、「X線による増収」(各社新聞)と「去る9月30日付の『帝国』追放」の写真、そして、大学行政(DB)、自治運動(P)、文化会(RY)、運動会(BF)、職員組合(TT)、厚生運動(MS)、各大学高専(YM)、学界(KT)、人文科学委員会(BO)の署名記事、六段の写真の組み合わせという構成である。写真は、①出来上った応援段の低声援する本学生(5月後楽園)、②押し寄せた3万の大衆(5月祭)、③1月関東連合学生大会の人波、④盛なダンスパーティ、⑤学生メーデーにおけるデモ、⑥水害に働く学生医療班、の六枚である。太学行政は、(2)「余りにも未解決、総合大学」への道末だし」が見出しである。

次の10561057号一面に六段ボックスで横(3)「年頭に当り」南原総長談」が顔写真入りである。新大学制について、総合研究について、学生生活・

厚生面について、教職員の待遇改善について、研究所について、研究の隘路打開について、世界的大学について、の七項目に分けてある。祖国再建の使命に燃え、世界的大学を目指す南原総長の自信に満ちた談話で、まだこの時点ではX線による稲作増収についても、総合研究会の成果として挙げ、また、

なお大学に出版所を作る計画のもとに新春大学新聞、協同組合出版部等を合同したユニバーシティ・プレスが出来ることを期待している

とも述べ、計画が具体化して来ていることを示している。

次の1058号は、トップに(3)「広い関与方式を、世論にきく総長選出法」を載せている。新学制移行に伴う懸案の一つとして、総長始め学部長、評議員、教授の選出方法があるが、これについて各方面の意見をきいてみるという趣旨で、亀山一工学部長、経・舞出学部長、高木文学部長、文・辰野教授、平野義太郎氏、東商大杉本教授、宮村職組委員長、の七氏の談話が組まれている。

稲増収問題。ここでの時期、問題化したX線による稲増収実験を纏めておこう。1051号で、横「総合研究会初の成果」として、(2)「米を四割増収、早矢仕志村博士が実験に成功」と、X線照射装置の写真と二人の顔写真を入れて報じたのが最初である。

発芽した籾にX線を当てるだけで四割以上も米を増収出来るという研究が本学総合研究会の初の成果として去月廿八日発表された

という書き出しで、早矢仕博士談、南原総長談が付けられている。続いて(1)「米国でも同様の実験」があり、UP電が実験結果に疑念を抱いているという米学者の説を報じたのに対し、志村教授の反論を載せている。そして、同号二面には横(1)「X線照射に依る稲の増収の研究、早矢仕功」(横)という実験報告も載せている。

さらに、1053号は、(横)「X線・実験の反響」(3)「総長研究拡充を企図、栽培過程に農学部批判」と題し、

「吹っつぶ食糧難のニューウツ」として新聞紙上に大々的に報道され、その影響は極めて深刻であるが、この実験の確実性並びにこれをいちはやく発表した大学の社会的責任について、東大関係諸学部特に農学部方面から鋭い批判がすめられている

とし、農学部の野口教授、佐々木教授の談話、これに対する早矢仕談話を載せている。記事は(2)「本格的に総合研究を、南原総長語る」と続き、論説も「総合研究会の成果について」と題し、論点をあげている。すなわち、一、実験が他分野、特に農学への協力を求めなかったため「厳密な科学性を与えることが出来なかった」、二、総長が総合研究の成果として発表したことは「軽率のそしりを免かれない」、三、総合研究会の「性格運営が不明朗且つ弱体であった」、の三点である。同号二面の「音叉」には「X線による米の増収について、民主主義科学者協会東大支部谷田沢道彦」があり、民科支部が早矢仕博士を招いて討論した結論を、六項目の疑問として報告している。本社でも、十二

月二十日、一工において志村、早矢仕博士を招いて公開討論会を開催し、その内容を『季刊大学』第五号に掲載した。

そして総長が「年頭に当り」の中でこの成果を強調していることは既に触れたが、1056号は(2)「放射工業株式会社設立か、志村氏のX線研究を工業化」という記事を載せ、志村教授、資金を出す産業復興公団副総裁と企画部第一課長、可能性有りという仁科芳雄博士の談話が取ってある。三面には、研究の独自性を守るため「志村研究室を去る、早矢仕功」という声明書があり、その上に、古島敏雄の「X線照射実験懇談会を傍聴して」(上、1058号下)が載せてある。

次の1058号は(1)「志村教授大学を去る」と事件の終結を告げている。これは、志村教授の「X線応用研究の工業化はその科学的信用度が問題となり」、多数の営利会社との無軌道な関係も明るみに出て、亀山学部長に辞表を提出、「総長もこれをみとめて、近く正式に退官の発令を見ることになった」というもので、次の1059号に(1)「志村研究室を解散」と出る。二面には、「志村教授に関する事件に就て、亀山直人」があり、「音叉」にも「志村問題に寄せて、東大農学部嘱託・田村三郎」がある。同号「主観客観」もこの問題を総括し、明らかにした事実を列挙し、志村博士と早矢仕博士の運命的な結びつきがはからずも大学の病弊を切開するメスともなったが、近來の不幸事件であると断じている。

講義、人事関係。1042号に(1)「経済学部「特殊講義」、1044号に(1)「新

渡部「記念講義」(大内教授)、104号に(1)「米^(つこ)医^(い)軍^(ぐん)の特別講義」、1059号に(1)「サビアー教授講義」がある。1056 1057号に(1)「ブランドン講師開講」があり、1058号に(2)「変らぬ二十五年の愛情、ブランドン客員教授開講」が二段の写真を入れて紹介され、高木文学部長談、そして「TO JAPANESE STUDENTS」と題する格調高い英文のメッセージが署名入りで載せてある。1060号に(1)「国史科に古島氏を」、1063号に「岩生成一氏内定か、文・国史科後任教授」、これは追放された板沢教授の後任である。1066号に(1)「川島研究室伊豆へ」がある。

1040号に二段通し組みで(2)「七名誉教授発令」がある。「延びに延びていたが、漸く二十二年七月十四日付でしびれのきれるころ」発令されたと市川三喜氏等七名が載せてあり、1061号に(1)「高野氏ら名誉教授に」がある。昨年三月に退官した今井登志喜氏等三名に懸案の高野岩三郎氏を加え一月二十三日付で発令されたとのこと。1047号(1)に「経・神戸助教授」、1058号に、顔写真入りで独文科主任教授(1)「木村謹治氏」の計報がある。

1061号に(1)「三月定年十四氏」、顔写真を纏め(1)「定年教授略歴」がある。法・高柳賢三、文・児島喜久雄、二工・竹中二郎、理・山口与平、農・増井清、一工・田中豊、文・辰野隆、一工・釘宮磐、医・緒方章、農・松葉重雄、一工・佐野秀之助、農・平塚英吉、二工・岩崎富久、二工・清水菊平、(写真欠)の十四教授である。そして1063号に写真入り二段ボックスで(2)「教壇を去る辰野教授」がある。

次に学内の新学制への動き。先ず1044号に(2)「教員審査会に人事権、北大の新大学制審議公開で進む」という記事がある。北大では三月以降審議を公開して来たがその成果は大きく、試案の大綱が纏まったというもので、続いて(1)「教授会を公開に、東大職員組合の案」がある。職組の研究刷新委員会の提案で、各種の会議の公開、学生の参加を骨子としている。同号の「音叉」にも「新大学制審議を公開せよ、経・滝川進」があり、1046号に(1)「新大学制審議公開への動き」と商大の自治委員会の動きを伝え、「東大でも公開への希望をすてたわけではない」という学生委員阿部君の談話を載せている。同号の論説も「新大学制審議公開について」と題し学生の参加を要望している。

1062号に(2)「二工は研究所に、新学制・工学部の構想」がある。これは準備委員会の決定であるが、一工、二工を合わせて一つにし、二工跡に、「生産との関連に重点をおいた工学中心の研究所」と、大学前期二年のジュニア・コースを置くというもので、一高と二つになる。そしてこのジュニア・コースを審議するため、1063号に(1)「第四特別委員会設置」が報ぜられ、1065号のトップに(3)「東高、浦高を合併、千葉と駒場に教養学部」と準備委員会の結論が報ぜられている。東高と浦高を二工跡に移し、駒場と二つの教養学部を作るというのである。

学生生活関係。1066号に(2)「外食者八割が内職、激増する食費の比率」という三月一日に厚生課が行った「学寮生計調査」がある。学生会館を含め十寮二六〇名(外食一〇九名、内食九二名、自炊四九名)に対

する調査であるが、外食者の支出は約二七〇〇円となり、去年の五月に比べ三倍になっている。

スポーツ。1042号に(1)「本学明治を破る」、1044号に(1)「運動場使用扱いは運動会で」、(1)「恒例の全学運動会」があり、写真入りで(2)「御殿下に秋弾む、白熱する学内野球」というものもある。医・教室対抗、一工・学科対抗、法・インターハイ、全学・職員対抗、が取り上げられている。1045号に(1)「全学運動会プラン決る」、1046号に、当日のひとつまが「秋空はれて」と題する二段の写真で載っている。1048号には野球部監督の津田収の「六大学リーグ評」がある。成績は二勝一分七敗で第五位であった。1054号の「回顧と展望」では、(2)「運動会・出来上った応援団、盛だった素人軟式野球」と総括されている。BFの記号署名があるから、当時「ボーフラ」とも呼ばれていた筆者であろう。

その他、1043号に、(1)「都の違約に抗議、各大学の水害救済学生で」、(1)「一万円を突破、水害寄付金小計」がある。1045号に横(British Technical Periodicals: Todai Toshokan e)があり、C・I・Aを経て、The United Liason Mission から工業関係の雑誌29種が贈られたと、その内容を載せている。また、1049号に(1)「二工学内解放」、(1)「第二回結核検診」、1046号に(1)「保健対策整備の要、結核検診結果発表」がある。1052号に(1)「帰省切符一括購入」、これは交通公社との懇談会で、帰省学生が各学部事務所に申請すれば、公社が切符の割り当てをしてくれるというものである。1059号に(2)「査定は緊縮方針、来年度本学増加予算要

求額」、1061号に(1)「学校工場を」、1063号に(1)「博士の七〇％は医学部」、1066号に(1)「19年度制服受取りに」というものもある。

年度末が近づき、1058号に(2)「文卒論傾向、散見される時代色」、(1)「就職戦線異常なし」とあるが、1061号に(1)「法学部・就職競争激甚」と官庁金融関係の結果が報じられ、1064号に(2)「就職戦線・求人数に変化なし、上京学生は寮のある会社を」という二月末に纏められた報告がある。(1)「法・言論出版関係希望激増」、(1)「経・金融関係圧倒的」、(1)「一工・大部分民間工場へ」、(1)「二工・土木冶金就職率半数か」、(1)「農・大部分は官庁入り」と続き、次の1065号に(1)「文・多い新聞志望」とある。そして(1)「卒業式・巣立つ二六八四名」と、三月卅一日の挙行が予告され、1066号に(1)「総長・卒業生と面談」と式後の予定が載せてある。

入試関係。1058号に(1)「本学入試細目」、1059号に(1)「続本学入試細目」、1060号にも(1)「続本学入試細目」、二面に一工・二工の(1)「入試細目」と続き、1062号に(1)「文入試科目きまる」とある。1060号にはまた、(1)「文・聴講生出願規定」、(1)「受験料二倍にもある。そして1063号に(1)「各学部志願者数、二十三日現在」、1064号に(1)「受験者集計、二十九日現在」があり、1065号にその纏めとして横(British Technical Periodicals: Todai Toshokan e)「試験地獄再現」(2)「無競争学科なし、女子志願者二倍に増加」と書かれ、例年の通り(1)「出身別集計」と(1)「学科別集計」が載せてある。1066号は、(2)「窄き門をねらう、十四日から東大入試はじまる」と七名の受験生の感想も入れ、三段に二枚の

写真を組み合わせている。”上は入試終って雑踏するアーケード、下は今日の戦績を語り片や泣き片やなぐさめる女子受験生スナップ”と説明されている。(1)「法学部入試問題」もある。

ボックス記事。関連記事の所で随時取り上げて来たが、その他、1042号に四段で(2)「好評の文学部壁新聞」、文学部の学友会のもので写真入り。1046号に四段で(2)「卒業証書貰う志賀義雄、免状など有難くない文学部」、事務室で預っている受取人のない四十数通の卒業証書のうち志賀義雄の分が渡されたという話で、川端康成等が続いている。文学部事務室の森さんに青山と二人で会い、実際に金庫をあけて見せて貰った思い出がある。青山の執筆。1043号に三段で二段の写真を入れ(2)「東京大学」に衣がえ、1063号に三段で(2)「5月祭初日・大学記念日」に、入学式は4月12日」とある。今年から今までの大学記念日に入学式を行い、新入生が少し馴れた五月に大学記念日を置くというものの、なお卒業式は従来通り三月三十一日とのこと。1065号に四段で一段の写真を入れ(2)「日光植物園を拡張、高山植物研究に、御用邸跡を移管」がある。手狭な小石川植物園日光分園に隣接の田母沢御用邸の無償払い下げを受けたというもの。

カメラの見た学生生活

青山の担当で続くが、ペンとカメラの二刀流という武器を使い、彼は正確に事実を報道描写する方向から、映像に対して皮肉辛辣なコメントを付けることによって、現実を新しく再生させる方向に動いて行く。詩人としての春山の才華が遺憾なく発揮

されているが、それと同時に、当時の編集部員、そして東大生の生活感覚を確実に代弁していると思われるので、少し引用する。

1042号③「水禍の町に出動」、給水班、医療班の写真四枚を組み合わせた五段の大型版。1043号④「歌声よ起れ」、写真は三四郎池端のYMCAの讚美歌練習と音楽班定期合唱会の二枚。

「灰色の青春」を云々するものは誰か、苦難に満ちた学生生活のなかからも新しい青春は再建され、敗戦の焼土のなかからも、歌声は高らかにおこらねばならぬ

1045号⑤「懷疑は踊る」、写真は十八番教室の水害救済資金募集パーティ。

銀座か新宿あたりのホールに行つて見給え、そこには六流国の植民地文化以外の何ものがあるか―(中略)ダンスは西洋で育てられた羨しい風俗である、然しこの涸れ果たて現代日本の生活地盤から如何に健全なものゝ芽を育てることが出来るか、問題はこことにあり「生活」との結びつきを失ったダンスは果しなき無思想と墮落への拍車となり終るだけであろう(後略)

1047号⑥「講義さまざま」、写真は、法文系二十五番を埋める学生と、理学部鯨島研究室の実験の二枚。1048号⑦横「昼食ひとゝき」、芝生で弁当を拡げる学生の俯瞰写真。1049号⑧「落葉をたいて」、木枯らしが吹き荒れ銀杏並木に散りしいた落葉を焚く早朝の写真、朝寝坊の諸君はこの美しさは御存知あるまい」とある。

1052号⑨、タイトルは無いが、行列、がテーマ。写真は、廿五番教室の映画会、第二食堂、郁文堂書店、のそれぞれの行列三枚で、

毎夜々々の停電とすさまじい通学のラッシュと、ひもじい外食と、それに何時間も占める行列を加えると、どうやら現代学生生活の地盤は十五世紀的感覚と廿世紀のエチケットとの交叉点あたりにあるらしい

1053号⑩「停電無情」、下宿が停電のため喫茶店でねばって試験勉強をする学生の写真。

1056号⑪「休暇あけ」、試験期をこせるだけ稼いでおいて」という、内職の掲示板に喰い入る角帽姿等三枚の写真。1058号

⑫「寒さにめげず」、街頭売り、グラウンドでの素人野球、図書館、と三態の学生の姿を集め、「戦いの庭で否応なしの耐乏生活を貰かされて来た昭和の子供は、寒さにめげず元気一杯だ」と。

1059号⑬「職あれど食なし」、求人掲示板に集まる学生の姿と、卒業生の失業群という見出しの昭和五年の朝日新聞の写真。「就職にはありついてもそれで食えそうにないというのが就職の悩みだ」。1060号⑭「芸は

身を援く」、資生堂ギャラリーで開かれた女子学生手芸生産化協議会の手芸品展示会の写真。1061号⑮「春は何処から」、写真は三四郎池畔の女子学生二人。

1062号⑯「生活をまもれ」、授業料三倍値上反対署名運動のスナップ。

1063号⑰「大学歓楽街」、土曜日の午後の映画会音楽会の立看の並ぶアーケードの写真。1064号⑱「就職最前線」、世一番教室で行われた朝日新聞

入社試験の写真。1065号⑲「研究に夜は更けて」、夜九時正門が閉じられても研究室の灯は消えていない。正門と研究室の写真。

1066号⑳「大学展望」。

時計塔に昇って「東京大学」を展望しよう、迷路のように折重なるビル、林、並木、池……だがわれ／＼はこの風景の壮大さに素直に酔えぬものを感じる、外ならぬその内景の暗さを身にしみて知りすぎているからだ、此の大学の壮大さを真に壮大な内容で充たすために、カメラの見た学生生活の風景を真に明るくするために、学問と文化の真の栄えをもたらすために、いま危機に立つ大学と大学生とにかけられた使命は大きい

最終回に相応しい写真と文章である。

横組みの「学内ニュース」、見出しがベタで読みづらいが、内容は豊富である。1046号「委員で学内清掃」「角帽がかぶりたい」「試験制度のよ論調査」、1047号「東大惜敗：朝日討論会」「忘れられた評議会」「校内理髪屋繁昌」、1048号、既出の「戸田博士退官記念会」「二工で演劇コンクール」「付属病院演芸大会」「18番教室にレーニン・スターリンの画像（写真付）」、1049号「緑会大会」「図書館利用者増す」、1051号「東大に連盟書記局」これは国立大学自治連のである。「トマシッチ演奏会」、1052号「合唱コンクールで優勝」「文学部で卒業者名簿」、1053号「学寮建設を促進」「大学の門」に抗議」「戦歿学生の遺族を招く」、1056号「冬の内職」「冬の学校」「手紙で生活調査」、1058号「自治会で女事務員を求

人」、1059号、既出の「本学バッチ候補作品」「可哀想な巡視」余りにも
 安い守衛の給料! 1060号「文・タイプライター盗難」「文・プリント異
 変」、1061号「学内で用紙の割当を協議」「自治会で運動街頭署名」、1063号
 「文化会で会報」、1064号「弥生寮生も寄金」学寮建設へ、「二食に小喫茶
 部」、1065号「出入困難な経研究室」「試験延期の波紋」、金も食糧も使い
 果たした学生達の困惑!

その他、「学内メモ」「人事」「学界」がほとんど毎号載っているが、
 これは割愛する。

学生の調査報告。学部会のものでないので、そこで取り上げる。

【学 外】 1051号には(1)「全国高校長会議開催」の予告と、(1)「来る十
 日、総長会議開く」があり、会議を前にして(1)「学究的」を特色に、
 鳥飼総長京大を語る」という顔写真入りの四段ボックスがある。国立
 大学自治連結成の取材のため京都入りしていた川上が面談したもので
 ある。次の1052号のトップに四段ボックスで(2)「有光文部次官談・大学
 教育の理想実現、困難を克服して新学制実施」が顔写真入りであり、(3)
 「全国高校長会議開く、革新と伝統の悩み、新学制への論議活潑」が一
 段の会場の写真を入れて続いている。(1)「高校長はかたる」として、天
 野一高、野口二高、松岡姫高、山尾福高、大室静高、落合三高、の各
 高校長の談話があり、その横に四段ボックスで(1)「語学二課目はデマ、
 東大入試の細目は未決定」とある。これは当日、一部に流布していた
 語学二課目説について医・理を除いて根拠がないと東大側から説明さ

れたというもの。

同号には(1)「国立総合大学総長会議開催」もあり、次の1053号に(3)「国
 立総合大学総長会議、一貫した四年制へ、大学地方移譲は慎重に」と、
 新制大学、大学予算、明年度入学試験、に分けて会議の内容を伝えて
 いる。関連して(1)「大学入試要項内定」、(1)「旧高専入試要項決定」が
 あり、年が明けて10561057号に(1)「大学入試要項決定」と出る。1059号に(1)
 「国立総合大学事務局局長会議開く」、(1)「関東高校長会議開く」、1060号に
 (1)「官立大学長会議開く」、1062号に(1)「新学制へ移行を協議、国立総合
 大学事務局局長会議・官立大学学長会議」がある。

文部省関係では、1042号に(1)「学校農場はそのまま」、1052号に四段ボッ
 クスで(2)「東体育局長談、保健と密接した体育」、(1)「とり去られた「帝
 国」、1058号に(1)「通信教育始まる」、1060号に(1)「文部省教職員課生る」、
 1061号に(1)「引揚学徒の転校」1062号に(1)「体育振興委員会生る」、(1)「五
 医専医大に昇格」、(1)「専検、実検に新規定」があり、1066号のトップに
 顔写真入りの四段ボックスで、(2)「森戸文相談、文部省は変るべきだ、
 教組学生運動の健全な発展を」がある。論説も「文相に望む」と題し
 て、留任した森戸文相が解決しなければならない諸問題を挙げている。
 その他、1043号に(1)「近く図書目録完成、医科大学図書館協議会」、1044
 号に(1)「その後の医科連」、(2)「解説・国会図書館への要望、官僚的調
 査機関にするな」がある。これは調査研究機関労働組合協議会の声明
 書を中心に、予定される(1)「国会図書館」の問題点を纏めたもの。1048

号に(1)「高文第一次発表」、1051号に(2)「日米学生会議、文化交歓の先鞭」があり、(1)「日米学生会議の歴史」(1)「米代表メッセージ」が付けられている。1053号に(1)「ユネスコ青年連盟結成へ」、1058号に(1)「文連芸術委員会ひらく」(民主主義文化連盟)もある。

1045号に(1)「大学教授連合評議員会」、1056 1057号に(1)「教授会を強化、第三回大学教授連合総会」、1059号に(2)「地方移譲は慎重に、大学教授連合で意見書」、1065号に(2)「教員身分法を検討、全国大学教授連合総会」がある。

新学制。1052号に(1)「体育を大学の正課に」新制大学基準委員会の答申とあり、1053号の題字横に四段ボックスで(2)「大学設置委員会生る、新制大学設置認可を審議」がある。委員四十五名は、大学基準協会から二十二名、高専から十一名、関係官庁から七名、その他日教組言論機関の代表五名で構成され、その氏名が載せてある。1056 1057号のトップは(3)「新学制第二段階へ」で、(1)「新制大学、実施は来三月から」と動き始めた大学設置委員会の動きを伝え、さらに、(1)「新制高校、勤労青年に解放」と七日に発表された具体策を載せている。そして1063号に(2)「大学設置委員会、申請基準決まる」、1066号に(1)「新制大学審査始まる」と出る。1065号に(1)「大学教育審議会案を決定」とあるが、これは大学基準協会のこととある。

教育刷新委員会。1049 1050号に(1)「委員長に南原総長」とある。安倍能成が辞任したための交替である。1053号に(2)「国立大学案を検討」とあ

り、地方移譲、ジュニア・カレッジ、私学振興、に分けて説明があり、刷新委員会の構成も解説されている。1056 1057号に(2)「文化省」設置を提唱、これは十二月末の五十回総会において、「大学の地方移譲が実際に困難なことを指摘し、文化省(仮称)及び中央教育委員会の設置を提唱したものである」。

1061号に(1)「地方移譲具体化」とあるが、これは教刷委としての地方移譲の具体案である。1062号に(1)「学芸省の設置を」という五十五回総会の決議もある。

学術体制。1045号に(2)「学術体制刷新委員会、使命と提案を討論、廿四・五日第三次総会」、(1)「新体制案十件が既著」と予告され、二面に平野義太郎の「学術体制刷新の基本問題、科学と政治を直結」を載せているが、その報告は1046号のトップに、横(4)「学問と政治」で熱論、問題整理に五特別委員会、学術刷新委第3回総会」とあり、(2)「先ず科学者の組織、行政への介入に限度」と「学問と政治」論争の目ぼしい発言を載せている。1047号に(2)「続々と新体制案、学術体制刷新委で整理中」とあり、民科案、小倉金之助他四委員案、歴研案、工業技術涉外連絡会案、医学涉外連絡会案、の五案が紹介されている。1049 1050号に(1)「第四会総会、三月迄に成案作製」とある。

1054 1055号の「回顧と展望」では、(KT)が(2)「学界・科学をどう政治に、刷新委難行を続く」を書き、十二月下旬に行われた第五回総会について、一、審議機関、二、行政機構、三、選挙に関する具体案、の成案を三月までに纏めるとしている。1059号に(1)「学術刷新委第六回総

会」の予告があり、1060号のトップにその報告がある。(3)「科学者会議を設置す、新學術体制の要綱決る」が総見出しで、(2)「審議・政府の諮問建議機関」、(1)「行政・内閣に協議会、官僚化避く」、(2)「選挙・七部門地域別に、投票は純學術研究者のみ」と三項目について各委員の発言も紹介して纏めている。

1064号は第七回「総会終る」(2)「審議最終段階へ」と報じ、(1)「焦点は選挙関係」、(2)「公聴会は十五日、但し一般の発言は認めず」と続け、(1)「選挙規定に遺憾」という平野義太郎の談話を付けている。論説も「日本學術会議とその選挙方式」と題し、公聴会の運営その他から「我々は委員会を民主的だとして協力するわけにはゆかない」とし、「徹底的批判を加え」ることを約している。1066号に(3)「學術新体制公聴会ひらく」とその報告があるが、(2)「誰のための科学、教授的」選挙方式に非難」と発言を紹介し、(1)「委員会不信の声」と続けている。また、1064号に(2)「研究費配分は正へ、地学団体研究会動く」というものもある。

人文科学委員会。1046号二面に(1)「東洋文化研究会議」、これは人文委後援で中研、東文研等諸団体が開くもの。一面には、(2)「新憲法を巡って、一日から人文科学法学部会」、(1)「哲学大会終る」、1047号に(1)「文学術大会」、10491050号に(1)「人文・経済学大会」、1051号に(1)「八・九兩日に人文委員会総会」、(1)「経済学大会懇親会」、1052号に(1)「五部合同大会を望む、人文科学委員会総会開く」、1053号に(1)「新委員推選」があり、各部の新委員の名前が載せてある。10541055号の「回顧と展望」は(BO)

が(1)「注目される業績」と総括している。1061号に(1)「人文科学研究費補助」がある。昭和二十三年度の募集である。

他大学高専関係。1042号に(1)「名大に夜間部実現か」、1043号に(2)「私学授業料、平均二千円突破、自治連で対策を検討」、1047号に(2)「生活費二千円を突破、東北、京都学生実態調査」があり、10541055号の「回顧と展望」では(YM)が(2)「各大学高専・自力復興の成果」と、復興、学園民主化、私学、昇格運動、文化運動、に分けて纏めている。1065号に(横)「法政大学もめる」(2)「経営」と「教育」対立、学生も加わり二派に分裂か」がある。

「学園短信」は正月の10541055号を除き、引き続きベタのゴチックの見出しで毎号何項目か載っており、重要な問題も含まれているが、分量の関係で残念ながら割愛する。ただ短信のトップに二段の見出しの記事を置いている号もある。1045号の(2)「高校の交流積極化、関東高校間の連絡成る」、1064号の(2)「学生参加も考慮(京大理学部)、学部行政を徹底的に民主化」、1066号の(2)「火災続発に警告、文部省、廃校放校をも辞せず」である。これは「最近八高・六高・三高・東高・京大等官立学校に火災が続発するので」文部省が警告を発したというもの。

【自治運動】改組した学生自治会の動き。1043号に(1)「委員の授業料免除、学生自治会で運動」、1045号に(1)「学風振興運動」、1046号に(2)「今後のあつ旋中止、問題の中央郵便局から求人」、これは中央郵便局からの大量求人申し込みに応じた厚生委員会が実状調査したところ、納得

しかねるので声明を発表し幹旋を中止したというもので、委員談がついている。1053号に(1)「合・不合格制圧倒的」、自治会の行った世論調査の結果で、定例の教授学生連絡懇談会で討議すると報じられている。同号にはまた(2)「国鉄・学生運賃引下げ運動、来春値上を控え学校教育局も協力」がある。これは来春を目標に各団体と提携して進めているもので、委員の文・直井君の「今度こそ…成果をあげたい」という談話がついている。そして1060号に、(1)「運賃値上反対、実行委員会活躍」と、自治会のみでなく「広く一般学生から成る東大実行委員会」が組織されたことが報じられている。1058号に(1)「揭示権を学生に」と出るが、1061号に(1)「揭示権の決定延期」、そして1063号に(2)「揭示、学生管理に」と学部長会議で承認されたと報じられている。1060号に(1)「学生自治会中央委員会、職組と協力」、1063号に(2)「自治会改組、緑会提案を否決」がある。

次は各学部会の動き。1043号に(2)「希望学科に入れよ、文学部学生大会」、(1)「盗難ひんびん」、1044号に(2)「優良可制の撤廃、緑会で試験制度改革を取上ぐ」、(1)「経友会でも学生大会」、(1)「丁友会会則決る」、(1)「文・特殊講義」があり、1045号に(3)「文・生活調査、夜間授業を望む声、内職希望は八十%」がある。内容は、横(1)「住居・家庭」、(2)「内職・追っつけぬインフレ、求めて得ず」が半数、(1)「欠席原因はアルバイト」、(2)「生活・生活費二六五〇円(九月)」、(1)「学制・三学科制は止めよ」である。

1046号に(1)「経友会も自治機関に」、(1)「理学部会委員改選」、(1)「二工自治へ動く」があり、1047号に(3)「法・経世論調査、レポート制採用を希望、試験・授業制度改革へ」がある。(2)「試験制度、合・不合格制を支持」、(1)「ゼミナール、ヤミ取引を排せ」、(1)「夜間読書室がほしい」と続き、法・我妻学部長、舞出経済学部長、経・古谷助教授、の談話が添えられている。1051号に(1)「夜間読書室はまだ」と「実現は仲々先のことになりそう」とある。

1047号には他に、(2)「試験制度の改革を討議、経友会の学生大会ひらく」、1048号に(1)「経・再び学生大会」、(1)「六年ぶりに緑会大会」、(1)「緑会叢書発刊」、1049号に(1)「経友会委員会、総辞職す、新鮮な再出発を」、1051号に(1)「理・合格制を支持」、1052号に(1)「経友会新委員会発足す、地道な仕事を」、(1)「緑会・代議員制を議決」があり、論説は「最近の自治運動」である。経友会大会が流会して委員が総辞職したが立候補者が定員不足、という状況について、内職に迫られている学生の立場から問題点を指摘している。1053号に四段ボックスで(2)「文・三学科制、第一志望へゆきたい」、(1)「緑会新委員改選」がある。

1054号の「回顧と展望」では、(P.P.)が「自治運動・実質的な段階へ、対策を超越す生活難」と、自治会、学部会のこの一年の動きを纏めている。1059号に(1)「緑会、合・不合格制を早急に」、(1)「生活費、平均二五〇〇円へ」、これは経友会がこの冬行った「経・生活調査」の報告の一部で、次の1060号に全体の結果が載せてある。(2)「内職と講義不満

が欠席理由、「理論経済学」が聴きたい」が総見出しで、父兄職業、住居・比較的稳定、登校状況、講義・理論経済学の講義を、試験制度、内職・ダンスの先生もいる、生計費・七割前後が食費、と続き、生計費、内職の割合等三つの表が付けられている。

1061号に(2)「法・試験調査、試験二期、合・不合格制、圧倒的支持、ゼミナール拡充の要望九五%」とあり、(1)「緑会、試験制度改革に進出」、(1)「経教室大会活発、政治的揭示自由」、そして四段ボックスで(2)「舞出経学部長の失言?」がある。これは経友会で教授と学生の懇談会を行つたが、その席上、舞出学部長が、

学生の力で学生の生活難を解決できるなどと思つたら誇大もう想だ、内職あつせんなどは学生課に任せて(中略)自治会は親ぼく的なことをやるのがよい

等と発言し、余りにも学生の実状を知らな過ぎると自治会でも問題になつていくというもので、論説も「学生々活問題の認識」と題し、これを追及している。「音叉」の項で取り上げた山田君と大内教授の応酬もこの時のことである。これを承けて、1062号はトップに(3)「教授は、学生運動をこう考える」と談話特集を組んでいる。(2)「教授と密な連絡を」のタイトルで、法・菊井教授、我妻法学部長、経・有沢教授、高木文学部長、農・野口教授、経・楊井助教授、(2)「負担の少ない学生運動を」のタイトルで、医・落合教授、田中農学部長、医・沖中教授、文・林恵海教授、亀山第一工学部長、法・辻助教、の談話である。

1062号に(2)「合不合格制成立か、農・制度調査委員会で決定」があり、1063号はトップに(4)「自治運動の成果、生活対策軌道に乗る」と、文・経・農の動きを大々的に報じている。すなわち、(2)「文学友会、全員希望学科へ」、高木文学部長、学友会委員の談話付き、(2)「経友会、四月から週五日制、教授との連絡協議会も実現」、(1)「農、甲・乙制は無意味」田中農学部長の談話付き、である。文学部については二段ボックスで(1)「報告だか、議題だか」と学生大会の前に教授会で決定されてしまい、集会は「明るく建設的な」一時間の懇親会だったと書かれている。そして(2)「京大では二期制か」、(1)「理・世論調査、九割が合・不合格制」、(1)「法・学生大会、秀合^(テツコ)不合格を決議」と続いている。1064号に(1)「教室会議生る、東大植物学科」、(1)「二工に自治会誕生」、1065号に(1)「合・不合格制決定延期、農学部教授会で」、(1)「緑会、優良制に決定」、(1)「左派が第一党、法・支持政党調査」、1066号に(1)「理アルバイト調査、希望は月千円」、(1)「農・合・不合格制、二十五日に決定」がある。1065号の論説は「自治運動一年」と題し、「曲りなりにも一応の目標を達成したといえよう」としている。

その他学内団体の動き。1042号に(1)「新人会」その後、1043号に(1)「新人会愈々発足」とあり、1045号に新人会の(1)「日本歴史講座」の日程、1046号にも(1)「新人会復活講演会」が載っているが、「主体性の確立、公式的極左主義の克服」を謳った中村・渡辺両君の責任が問われ、1056 1057号に(1)「東大細胞解散」と出る。これに対し1058号に(1)「新人会で声明」と

(1)「声明書要旨」と渡辺恒雄君談が載り、1060号に(1)「新入会総会終る、文化団体として再発足」、1061号に(1)「東大細胞、再建声明」、1062号に(1)「新入会で再建声明」と続く。1060号の「音叉」に「新入会総会を傍聴して、法・丸田」があるが、東大細胞内部の問題で迷惑したのは一般会員だという感想である。1065号の論説「自治運動一年」も後半はこのごたごたに触れ、その泥沼抗争の「わだかまり」の影響が各方面に出始めていることに警告を発している。

1044号に(1)「東大学生社研のプラン」、1046号に(1)「E・S・S英語講習会」、(1)「東大国際問題研究会生る」、1047号に(1)「民科・東大支部結成」、(1)「農学部班活動」があり、さらに(2)「読書文化研究会、図書評論」を発刊、1051号に(1)「発会記念に講演と映画、読文研の会員募集開始」とある。1048号に(1)「カトリック文化講座」、東大歴研の(1)「学内揭示版・日本歴史講座」、1049号にソ研の(1)「ソ連経済研究講座」、(1)「東大芸研講演会」、1052号に(1)「法律相談所、三河島支部を設置」、1053号に(1)「結研冬のプラン」があり、1054号の「回顧と展望」では(RY)が(2)「文代会・今後の発展に期待、虚脱から立上った文化団体」と纏めている。1056号に学生文化指導会の(1)「社会科学通信講座」、1059号に(2)「利益は五〇〇円に、文化事業部世論調査」、1060号に(1)「経で教室大会」、これは青共主催の新委員会の激励会である。1061号に(1)「社同、五月会と同調」、1066号に(1)「炭鉱の労働調査、社医研春秋プラン」、(1)「結研春秋プラン」がある。

女子学生会。1043号に(2)「光葉会・ピクニックにも行けぬ悩み、先ず学内に部屋がほしい」、(1)「全員が内職希望」とあり、1059号に(1)「女子学生、手芸内職の組織化」とある。

学外。1046号に(2)「全国的組織を志向、近く国立大学学生会議」があり、東大自治会も積極的に参加すると書かれ、1048号に(1)「19日から学生会議」と予告され、1049号はトップに(3)「第2回国立大学会議、国立大学自治連を結成、新大学制学生案成る」と「学生自治運動に新段階を劃した」会議の詳細をレポートしている。京都に派遣された川上の執筆である。(1)「連盟結成、全国的学生協組のかくりつ」、協組は組織の誤植であろう。本文には、いずれ全国自治連が結成された時は解消包含されることが確認されたとある。(1)「新大学制、大学基準の修正案をつくる」、(1)「生活問題、初の当番校は東大に決定」、と記事は続けられている。1051号の論説も「国立大学学生自治連の結成について」とその意義を強調している。

年が明けると1058号に(1)「国立大自治連、二月に大会」があり、(2)「大学地方移譲に反対、四大学、自治連と協議」というのがある。これは地方移譲に反対する東京付近四大学(商大、工大、千葉医大、文理大)の学生自治会が昨年末結成した学制対策実行委員会が、さらに、関東学生自治連、国立大学自治連と連絡し、三者合同の実行委員会を結成したというもので、日教組と協力して反対運動を進めるとある。1059号はトップに(3)「大学地方移譲検討進む」とその動きを追っている。す

なわち(3)「関東学生大会を開催、新学制問題の最終案を決定、日教組全面的に協調」で、既出の大学教授連合の慎重にという意見書の記事が続けられている。1060号に(1)「関東学生大会、関東・国立自治連で」と二月十日早大で開かれると予告され、論説も「文教の危機と関東学生大会」である。(1)「北海道学連結成へ」もあり、次の1061号に、(3)「刷新案を批判、教育復興連合学生大会開く」と会場の写真を入れて報告されている。議題は三つで、教育制度改革、学生生活の打開、協同組合への荷受権、として纏められている。大学の地方移譲等に反対、育英資金の拡大等諸対策の実施、そして全国学生協組連合、学生図書協会、学生食堂連合会からの要請で荷受権の確立、である。

その横の題字脇に四段ボックスで(2)「文部省の主導排せ、国立大学学生会議開く」があり、二月九日から十二日まで東大で十四校出席して開かれた会議の内容が載せてある。十日は早大の大会に全員全席している。さらに1062号で(2)「国立大学学生会議、授業料値上に反対、全学協議会の実現に努力」と決議された内容の詳細を報じている。1063号に(2)「参議院ではお叱り、教育復興会議の決議に回答」とあり、各方面に提出された大会決議(十二項目)への回答が紹介されている。社会党、参議院、共産党、大蔵省で、参議院は、田中耕太郎文教委員長が「以ての外だ」と言ったとあり、共産党は七枚の長文とある。そして1064号に(1)「教育復興会議結成へ」と各自自治連も参加した広汎な統一戦線の結成が伝えられて、激動のこの期間は終わる。

1062号に(2)「インターン法規案を作成、国立大学医科学生連合開く」と、十校が参集した第一回会議の内容が報ぜられ、1066号にも(1)「インターンも割引を、医連運輸省に陳情」がある。1063号に(1)「結研連合会生る」もある。

大学新聞連盟。1042号に(2)「統一団体に発展、第三回大学新聞連盟総会開く」、これは、従来の協議機関から決議機関として委員会理事會を設けることを決議したもので、加盟校は二十四校とある。1043号に(1)「育英会で座談会、都下大学新聞を招いて」、(1)「中国留学生と懇談」、これは中国留学生の同学会編集の中華留日学生報の招待による各大学新聞編集員との交歓会である。1047号に(1)「ジャーナリズム講座」、大学新聞連盟と学生ジャーナリスト連盟の共同主催である。

1052号に(1)「本社、大学新聞連盟を脱退」があり、(1)「声明書」が載せてある。これは、連盟の用紙獲得委員長(明大新聞部)が、

大学新聞用紙の公平均分化の名目で連盟の名において参衆両議院に不備且不明朗な請願書を提出した

ことに抗議し、否決されたため脱退したのであるが、この問題が翌年七月に火を噴くことになる。

【厚生運動】

1043号はトップに(4)「文部外郭団体の現状、温存される古手官僚、戦時中から続く諸団体」を置き、(2)「金のだぶつく育英会、利用者は官学が圧倒的」、(2)「学生は理解出来ぬ、旧官僚そのまゝの援護会」、そして、安原理事長の談話、さらに(1)「援護会に望む」として

全国学校協同組合連合会阿部君、日本学生図書協会碓井君、学生食堂連合会清水君、の談話を集め、もう一つ(2)「かげの薄い教育会、再組織・解散をめぐる」を載せている。論説も「援護会と育英会」と題し問題点を挙げている。研究体制に続く教育界の民主化第二弾というところであるが、内容は今一つである。1042号に(2)「一高生が一番よい」、学徒援護協議会開く」とあり、1047号に(2)「学生生活の認識を新たに、学徒援護協議懇談会」があるが、これは文部省地区大学高専連合主催で九月から十月にかけ各地で開いたというものである。

1059号に(1)「学徒厚生委員会生る」がある。これは、破局的な学生生活に対処するため文部大臣が諮問機関として設けたもので、委員長は天野貞祐一高校長、第一回総会は一月二十八日に開かれたとある。その学生生活の実状は、続いて(3)「手痛い授業料運賃の値上、底をついた育英資金」と纏められている。「底なしのインフレは冷い木枯しにのって学生生活の中を吹きぬける」と書き出され、委員会が「果してどこまでインフレの防塞の役割を果しうるか」と疑問を投げ掛けている。記事は、(2)「授業料、三倍に引上げか」、(1)「学生運賃、すえ置きは困難」、(1)「育英資金、申込者が激増」と続いている。授業料については大蔵省主計局文部掛と劔木学校教育局次長、運賃については今井出旅客課長談が添えられている。この後、1065号に(2)「組織的な内職対策、学徒厚生委員会特別委員会発足」とあり、委員会が「積極的に学生生活問題を研究することになった」と報じている。

停滞と混迷を経て（河内光治）

更に、学生が厚生運動にまで手を出すべきかどうかという例の舞出発言が絡み、1064号はトップに(4)「厚生組織の現状、根本的解決見られず」を置いている。生活難からの厚生問題が、学生運動の表面に出ざるを得なくなったこの時期の特色をよく表していると言えようか。記事は、(2)「本部学生課・求人申込を待つのみ、貧弱な組織に悩む」、(1)「援護会・九〇%の幹旋」、(1)「二工・学校の協力を」、協組の一部で設立の動きがある(1)「生産協同組合・当分請負仕事を」とあり、(2)「援護会を改組、官僚色を払拭」と続いている。「安原理事長辞任の後、今井登志喜氏が就任したが、これを機に全面的な改組が断行され様としている」というものである。

1044号に(2)「協組運動第二段階へ、全学協連で懇談会」があり、1047号の論説は「協組運動の方向」と題し、「連合体による組織化が急務の問題」と指摘している。同じように、10541055号の「回顧と展望」では、(MS)が(2)「厚生運動・相互連繋が急務、体制は整ったが不活発」と題し、協同組合運動、内職問題、下宿問題、に分けて纏めている。窮迫した学生生活の現状に迫いつけぬ組織の立ち遅れ、ということである。1059号に(1)「廿一日学生生活懇談会」の予告があるが、これは、食堂連合会、協組連、図書協会が主催し支部省、援護会の支援を得て開くというものである。

学内の協組。1042号1044号に「協組ニュース」があり、1051号に(1)「加入金百円に」、1052号に(1)「安い」が「まずい」、二食こん談会」、1056号に

(1)「代議員選挙迫る」、この代議員総会を二月十三日に開くと1061号の「協組ニュース」にあり、1062号に(2)「新役員を選出、初の代議員制総会ひらく」とあり、(1)「生産協組にしない」という内村君の談話がある。この総会については1065号の「音叉」に、「協組の反省を望む、経・江口」という厳しい批判がある。同号には「協組ニュース」もある。

セツルは1043号に(2)「セツル埼玉へ、農民の立上りを援助」があり、学生書房では1066号に(1)「二周年記念会」がある。

学内の職組。1047号に(2)「職組協議会、東大職員組合と改称、協議会から執行機関へ脱皮」と、漸く体制の整ったことが報じられ、1048号に(2)「取れるか追加予算、食えぬ副手の有給化へ」、1051号に(1)「団体協約結ばる」、1053号に(1)「天下りの廃止」、(1)「婦人部結成、農職組」と活発な動きが伝えられる。1054号の「回顧と展望」では(TT)が(2)「職員組合・生活権の確保と学園の民主化」と題し、昨年十月以来の歩みを要領よく纏めている。それによると、東大職組は現在十四組合三千五百人である。

1056号に(1)「二工で団体協約」、1058号に(1)「創造から守成へ」、これは新年を迎えての宮村委員長(地震研助教授)の運動方針である。1059号に(1)「図書館職組成立」、1060号に(1)「増俸を考慮」、なおこの記事の中で、東洋文化研、法学部に職組が結成されたとある。1061号に(1)「要求推進大会開く」、1062号に(1)「総長善処を約す」、1063号に(1)「団体協約案を議決」、1064号に(1)「総長との交渉開く」、1065号に(1)「暫定的措置を」、

1066号に(1)「漸進主義で」、いずれも総長との交渉についてである。その他、1042号に(1)「特別研究生増俸」がある。

六月八日に結成された日教組については、1045号に(1)「六・三制を推進、日教組中央委員会開く」、1047号に(1)「日教組・学術体制を練る」、1048号に(2)「六・三・三推進大会開く、明十四日・自治連も積極参加」とある。

1064号に(1)「学生との協力討議、高専職組大会開く」、1065号に(1)「デモ禁止に抗議」、これは同職組の二月十三日のデモに対し警視庁が制限を加えたのでこれに抗議し、その回答を得たが飽くまで闘うというもので、1066号に(1)「十九日総監と会見」と続けられている。

【適格審査】 1044号に四段ボックスで(2)「中審委・松本慎一氏を追放、近く末弘博士の判定も」とある。1049号に(1)「野間助教授を追放」、これは中審委、教職委を中心に次官提訴等も含めた九、十月分の中間発表である。1052号に(1)「板沢高田教授不適格」と、二人の「判定理由」が載せてあり、(1)「中審委・残るは三百件」とある。1053号に(1)「中央の判定は残念、高木文学部長談」がある。

1059号に(1)「中審委・三月中に完了、十一・十二月中間発表」があり、1065号に顔写真入りで(1)「安井教授追放確定」とある。土屋教授に続く大臣判定で、次の1066号の「音叉」に、「学問と良心の自由、東大との惜別に際して、安井郁」が六段の囲みで載せてある。そしてこれを含め三月八日現在の審査状況が(1)「教職審査・不適格七百名」と発表

され、末弘博士も年度内に終了すると報じられている。

署名論文

南原総長の演述は、1042号「人間革命と第二次産業革命、卒業式における演述」の一本であるが、本社刊行の演述集『祖国を興すもの』に続く、第二演述集『人間革命』の題名に採られる。

論争としては、1040号の菅間正朔の日農批判に対し、1046号で、日農竹内が反論を書いている。

1052号の中野重治の「寒いくもり空」は、「小ブルジョアジーとプロレタリアートとの日本民主革命にたいする関係の問題」が論争され、一応の結論が出たが、「今日の大学生生活の文学的反映」としては結実していない、これを、「四七年の日本文学に望みたい」というものである。

「遮断機」その他、文化文学関係について言えば、青年文化会議から、雑誌『近代文学』を中心にした人達との接触が強くなって来ている。編集部内で「偏向」を指摘されたこともあったが、志向が同調する以上、この傾向はまだ続く。映画評の佐佐克明は、東大映画研究会を代表する者であり、東大短歌会の作品にも紙面を提供し、学生の立場という基本線を疎かにしないように努めている。

また、この期は、前期にもまして書評欄の充実ぶりが注目されよう。「新刊紹介」も質量ともに多彩である。以下前期同様整理する。

停滞と混迷を経て（河内光治）

「特集」

☆世界情勢の展望（トルーマン・ドゴール・スターリンの写真）（1049 1050）

井上 勇 フランス・二分された危機、フランスの選挙と世界の動向

竹中清之助 イギリス・資本主義の再建へ、危機における労働党の役割

入江啓四郎 講和会議・国内秩序の世界化、戦後講和会議の意義
福永 英二 思想・ヨーロッパは死んだか、政治的対立の背後にあるもの

神野璋一郎 中南米諸国・インフレを克服し、防共統一戦線成るか

☆読 書（1049 1050）

戸田 貞三 書物の整理、天地何ぞ曾て一じんあらん

向坂 逸郎 嘘と真実

野間 宏 古本屋歩きは心の鎮静作用を満足させる

大室貞一郎 或る散歩、後宮に恨長く斜に琵琶を抱いて深く月を見る（対談）辰野隆・渡辺一夫 バリの古本屋

☆ノーベル賞受賞者（1049 1050）

杉 捷夫 文学賞・Andre Gide

杉 靖三郎 医学賞・Cari F. Covi, Fery T. Cvi; Bernav doA.

Haussay

小谷 正雄 物理学賞・E.V. APPLETON

漆原 義之 化学賞・Robert Robinson

☆迎春随筆(1054 1055)

美濃部達吉 歳旦随想、殊に仮名づかひについて

大内 兵衛 年末の水涕

本間 久雄 テムズ河

古畑 種基 骸骨に肉をつけた話

磯野 誠一 いつ見ても美しい星、内蒙と内蒙を通過

伊東 忠太 昭和^{マヤ}戌子の新年

久松 潜一 船弁慶など

東大短歌会 相聞(短歌六首)

猪熊弦一郎 (絵) パリの古本屋

(カット) 須田剋太、杉本健吉

☆国内一年 回顧と展望(貿易再開と全通デモの写真)(1054 1055)

土屋 清 経済・慢性化した危機、強力な政権を確立し整理を断行

せよ

沢開 進 政治・失望から前進へ、片山内閣をめぐる紛糾

大谷 省三 農村・微弱なる陣痛、不徹底な土地改革と農村組織

大友 福夫 労働・階級的自覚の昂り、地域闘争から経済民主化へ

☆学界の回顧と展望(1054 1055)

谷口 知平 法学・家族制度論、社会倫理の確立へ、民法学会の中

心課題

小泉 明 経済・価値論争、何が「本質把握」か、マルクスと近代

理論融合の歩み

川崎 庸之 史学・日本近代史、封建制度・家族制分析の問題、科学

的究明の歩み

坂本 平八 数学・統計数理、標本理論の発展、社会現象の調査に応用

大川 章哉 物理・高分子化合物、実験出来ぬ設備、外国資料の消化

が急務

☆新学制をこう考える…(1056 1057)

今井登志喜 新学制総批判・慎重な処置を望む、問題残す旧高等学校

辻 直四郎 新制大学への構想・四年一貫した教育を

天野 貞祐 新制大学への構想・前期大学論

新島 繁 社会科の問題・人権擁護の課目に、机上プランの学習指

導要領

大河内一夫 新しい大学院(上)・大学の大学たれ

〃 新しい大学院の性格(下)・深く専門教育を1058

麻生 磯次 新制高校論・教育の民衆化を、課目の弾力性にも期待

藤巻 幸造 6・3制の現場から・蜜柑箱の机で座学、国費、県費負

担への世論

☆1947 文化運動 回顧と展望(1056 1057)

増山 太助 文化・芽生えた新しい人間像

中島 健蔵 小説・自分たちの鏡としての文学

中村 光夫 批評・将来の予兆、希望の年

瓜生 忠夫 映画・契機を得た映画芸術の本格化

永井 智雄 演劇・這い廻るヒューマニズム

嘉門 安雄 美術・はつきりした本物とにせ物の区別

尾高 尚忠 音楽・想い付から創造と新生へ

桜井 恒次 出版・混乱の中に一条の光求めて

「講 座」

宮田喜代蔵 平価切下の類型 1064

「時 評」

小川 隆 心理学・未熟さの反映、文部省編『教育真理』 1045

寺沢 恒信 教育・新制大学の構想、日教組の立場から 1046

鳳 誠三郎 泌み出る科学の味、クーリッジ、ソレンセン二博士の講

演 1047

まつしまえいいち 人文科学法学部会・歴史は歴史家の専売品ではな

い 1048

佐藤 晃一 人文科学文学部会・文学に於ける伝統の問題 1049 1050

小林 直樹 人文科学法学部会・問題提示の正しさ 1049 1050

島 恭彦 人文科学委・経済学大会・“東”と“西”の交流、問題意

識の明確さを 1051

矢追 秀武 予防医学・百日咳に痘苗を、ワクチンは正しく製造せよ 1052

上杉 捨彦 労働基準法・労資共通の武器、団結による闘争が鍵 1053

停滞と混迷を経て（河内光治）

松井 清 大衆の利益に無縁、合理化政策による貿易の将来 1054 1055

宮村 撰三 前人未踏の分野、今村先生と歴史地震学 1058

伊藤 智雄 遺伝学・方法を見定めよ、否定された遺伝子 1064

「政 治」

田中 二郎 地方自治の相対性、その理想と現実について 1047

辻 清明 執務知識掌握の要、議会制は官僚制を克服するか 1053

岸 勇夫 不安化した連立、社会党大会と政局の動向 1059

中村 哲 政治意識の低さ、政党離合の日本的特質 1061

「法 律」

団藤 重光 刑法に於ける封建制の駆逐、刑法の一部改正について 1048

川島 武宜 離婚の「自由」、参議院による民法改正法案の修正につい

て 1051（1052号で訂正した表題）

杉本 俊朗 先ず官僚民主化、金融業法案の難点を衝く 1060

「経 済」

小林 義雄 生産と占有の矛盾克服へ、経済力集中排除と経済復興 1042

小林 良正 経済白書の具体的意図①・民主的錯覚の培養 1043

〃 同①・危機の技術的解釈 1044

武田 隆夫 圧倒的な国家依存、地方自治と地方財政 1045

木村禧八郎 千八百円ベース改訂の要、追加予算と物価体系の関係 1048

斉藤 四郎 徹底した資本擁護、国管案で増炭出来るか 1052

飯田 繁 資本と人口の過剰、資本主義的恐慌の問題 1056 1057

新庄 博 他人任せを止めよ、日本インフレーションの発展性 1058
 安部 隆一 ①『価値論』への一反省、使用価値をめぐって 1059

〃 ①生産力論への鍵、使用価値を再考察せよ 1060

西沢 富夫 何れが客観的か、ヴァルガとその批判者達 1061

遠藤 湘吉 滞納の経済的必然、納税塔とインフレーション 1062

森田 優三 経済循環の把握、国民所得統計の発達について 1063

信夫清三郎 国家独占の問題点、潮流新年号特集論文批判 1066

〔労働〕

磯田 進 労働法への背反、炭鉱労働強化の安本案について 1043

沢木 宇吉 転換する労働運動、生産復興と職場規律の確立 1046

〃 国鉄経営の実状分析、再建を阻むインフレ政策 1064

大友 福夫 資本攻勢の一面面、組合民主化運動の本質は何か 1065

〔農業〕

竹内 猛 (日農の立場) 管問氏に答う、分派活動の排除 1046

栗原 百寿 独占資本と組合金融、危機解決は下から、農林中金の四億増資計画 1065

〔世界の動向〕

杉本 俊朗 資本主義安定の条件、欧州復興計画と米国の立場 1044

中西 功 民族的独自性を、コミンフォルムと中共の立場 1047

岩村三千夫 昂る農民の政治性、中国内戦の変貌と今年の課題 1056 1057

寺西 五郎 民間資本の動員要請、米・世界政策と対日方針 1060

蠟山 芳郎 印度の労農組織、ムガル王朝からガンジーまで 1062
 アメリカ最近の表情 1063

神野璋一郎 新政治力の立場、第三党と労働組合

小椋 広勝 景気反動の年か、農産物相場の下落

〔社会〕

梅本 克己 理想への両支柱、実存的課題とマルクシズム 1042

真下 信一 学生生活の現状、攻学意欲と労働の矛盾 1047

津田 収 六大学リーグ評、守備力の脆弱 1048

柘植 芳男 本郷小石川文教地区・実現の歩む 1058

蠟山 政道 教授と政治 1061

小沢 正元 社会時評・世界的犯罪都市 1065

〔科学〕

立花 太郎 乾いて書けるインキ 1045

森口 繁一 安全率(横) 1049 1050

福見 秀雄 偶然の生んだ成果、ウイルスが赤血球を凝集する 1053

佐々 憲三 地震、予報は出来ないが予防施設が大切だ 1062

秋元寿恵夫 研究を分化充実、医学博士改廃の道 1066

〔学術体制〕

尾高 朝雄 学術体制・「誤解」と「曲解」、刷新委員会の立場から 1043

平野義太郎 科学と政治を直結、学術体制刷新の基本問題 1045

〔遮断機〕

平田次三郎 伝統への叛逆、新人椎名麟三と梅崎春生 1047

佐々木基一 新思潮の作者たち 1048

久保田正文 戦争を通過した精神、野間宏の文学について 1049 1050

遠山 茂樹 ヒューマニズム・見失った歴史家、津田博士の方法論的

限界 1051

花田 清輝 批判ということ、荒正人の二重感覚 1052

ユネスコ運動について 1053

中島 健蔵 ユネスコ運動の在り方

箕輪 三郎 ユネスコと文化人の立場

林 健太郎 マルクス主義と自由の問題、思索・世界評論の座談会を

見て 1054 1055

加藤 周一 神秘主義解説 1056 1057

平田次三郎 現代のレアリスト、花田清輝著『錯乱の論理』 1058

杉 捷夫 一つの悪風潮について 1059

岡本 太郎 悲劇的な立場の自覚 1060

梅崎 春生 ふところ手の文学 1061

吉川幸次郎 芭蕉と杜甫の漂泊 1062

星野 芳郎 テヒノロギイの再建 1063

土方 定一 第二回泰西名画展 1064

武谷 三男 物理学とヒューマニズム 1065

停滞と混迷を経て（河内光治）

清水幾太郎 “時のうごき” について 1066

〔文 化〕

なかのしげはる 寒いくもり空 1052

椎名 麟三 最近の世相から、ニヒリズムからの快^{（ツマ）}愈をこそ 1061

藤崎 健一 現代アメリカ文学の創作技法 1065

最近の（現代）ジャーナリズム検討（批判）

岩村三千夫 ①総合雑誌評 1042

野村 泰造 ②日刊新聞評・オポテユニズムの横行 1043

小山 栄三 ③新聞2・戦後新聞と世論 1044

井出 洋 ④労組から見た日刊新聞 1048

杉浦 明平 ⑤文芸雑誌・未だに百鬼夜行 1049 1050

小松 摂郎 ⑥哲学・思想雑誌・“実存と社会”の扱い方 1051

横山 正彦 総合雑誌評・意図と成果の喰違い 1063

美作 太郎 文化時評・日本ニュース、すぐれた啓蒙効果 1064

〔映 画〕

佐々 克明 ジェーン・エア・病理的傾向 1047

北口 郁 石の花・冴えない色彩 1048（太田怜）

青山 敏夫 第七のヴェール・主知的なあそび 1051

横田喜三郎 脱出・“脱出”はそえものだ 1052

佐々 克明 女優・今年の良心作 1052

青山 敏雄^{（マ）} 豚飼娘と羊飼・人種展覧会の面白さ 1053

登川 直樹 失われた週末・完成された習作 1056 1057

井沢 淳 第二の人生・現実克服の誠実さ 1060

コクトオの二作品 1061

東郷 青児 美女と野獣

加藤 周一 悲恋

青山 敏夫 エイゼンシュタインの死 1063

下村 正夫 大学の門・チャチな現実描写 1063

井沢 淳 誘惑・人間虐殺の映画 1064

渡辺 一夫 旅路の果て・人生の「黄昏」 1065

青山 敏夫 手をつなぐ子等・弾圧下のヒューマニズム 1066

〔演 劇〕

宮沢 俊義 とうとう出た「忠臣蔵」 1049 1050

瓜生 忠夫 文学座「歳月」「あきくさばなし」、二作の成功と失敗 1058

矢代 静一 民芸「破戒」、詩情にうらみ 1059

下村 正夫 新劇の更生とその前途 1062

〔美 術〕

鈴木 進 美術時評・現代画に欠けるもの、知覚の浅薄と技術の固

着 1043

本格絵画への反省、名作展と日展を観て 1047

(き) 石河光哉個展(写真・南原総長肖像画) 1052

鈴木 進 新しい美術の世界 1054 1055

〔音 楽〕

諸井 三郎 音楽時評・近代音楽の洗礼 1062

丸山 鉄雄 音楽時評・生活の音楽を 1066

〔随 想〕

服部 四郎 民族性のこと 1044

団 勝麿 バッハの小径 1059

服部 四郎 学生と本郷通り 1060

〔詩 歌〕

東大短歌会 青き葉蔭(短歌五首) 1044

混迷の果に(六首) 1048

青々と苔は萌ゆ(六首) 1052

野間 宏 (詩) 氷花(カット、少女裸像・西尾善禎) 1064

〔書 評〕

矢内原伊作 和辻哲郎・ゼーレン・キエルケゴオル、すぐれた紹介書、あれかこれかは読者の責任 1045

守屋 典郎 社会経済労働研究所編・日本民主革命論争史・日本資本主義論争史、客観的叙述の好著、平板な「論争史」のか

たむき 1046

まつしまえいいち E・H・ノーマン、大窪訳・日本に於ける近代国

家の成立、維新史概観の良著 1047

土岐 善麿 高倉テル・「ニッポン語」を読む、国語への愛情 1048

小松 撰郎 武市健人・ヘーゲル論理学の世界(上)、問題究明が形式的、マルクスとヘーゲルの扱い方 1049 1050

矢野健太郎 近藤洋逸・数学思想史序説、数学の社会性を解明、初心者にはいゝ手引 1049 1050

稲村 耕雄 「化学の領域」、若い研究者と学生の編集 1049 1050

安藤 孝行 高橋里見・包弁証法、創造的愛の欠如 1051

上野 道輔 木村和三郎・減価償却研究、純理論的研究の成果 1052

近藤 次郎 第一階偏微分方程式、便利な参考書 1052

大内 力 戸田慎太郎・日本資本主義と日本農業の発展、修正講座派に立つ、注目される畑作農業の分析 1053

森末 義彰 辻善之助編・日本紀年論纂、紀年論展開のあと 1053

江川 英文 野田助教授の近業、ポリタリスの現代的意義 1056 1057

穂積 重行 戒能通孝・近世の成立と神権説、色あせた公約数 1058

神西 清 本多秋五・戦争と平和、破碎の金剛杖 1059

西郷 信綱 大久保正・本居宣長の万葉集、書誌学的沈潜の意味 1059

若林 勲 本川弘一・脳波、ヒポテーゼの成果 1060

服部 之総 羽仁五郎・「哲学と死」を読む、『死と哲学』 1061

竹中 久七 新版中国経済要覧、具体的な情勢分析 1061

丸山 真男 中村哲・知識階級の政治的立場、鎧のかげのロマン主義 1062

大内 兵衛 世界金融経済年表・国際決済銀行第一・第二年次報告、金融史の好資料 1062

停滞と混迷を経て(河内光治)

本多 顕彰 工藤好美・文学論、精神の履歴書 1063

大島 清 大塚久雄・近代化の歴史的起点、大塚史学解明の為の好著 1064

川上 保雄 医学雑誌「ペニシリン」評 1064

小川 鼎三 小川政修・西洋医学史、医学会の早天の慈雨 1065

大谷 省三 古島敏雄・日本農業技術史(上)、技術論前進の楔、技術と経済との鋭い関連把握 1066

末松 満 三社年鑑評、軍配は「朝日」に 1066

季刊大学 第三・四号(22・11・20)

☆特集・文化革命論

羽仁 五郎 文化革命の必然性とその意義

山崎 謙 文化革命とインテリゲンツィアの使命

島田 政雄 文化革命における中国型と日本型

飯島 淳秀 アメリカ資本主義文化と能率の意義

☆特集・国語国字問題

新島 繁 国語改革とローマ字化の問題

池上 退蔵 新聞と国語国字問題

時枝 誠記 国語に於いて敬語を用ゐることの意義について

☆座談会・近代の大学を語る

(出席者)

川田信一郎、木村健康、前田陽一、丸山真男、宮川実、

中島健蔵、緒方富雄（ABC順）、司会・桜井恒次

まで（横）

上林貞治郎 日本工業の発展傾向、基本的性質の把握

井汲 卓一 農業恐慌の展望

迫間真治郎 ソ連経済学と近代経済学

☆国土計画の現状と対策

館 稔 人工問題の現状と対策

浜田 稔 戦災都市の復興について

西山 卯三 日本の都市計画

除村吉太郎 ふるい心理について、最近の感想

中村真一郎 文学の創造性、現代日本文壇の疾患

入江 弘 新しき美術の動向、植村鷹千代氏の美術論をはさんで

山田 坂仁 技術論Ⅰ・当面する技術論の問題

外村 大作 技術論Ⅱ・道具の発見

天野 清 世界観と物理世界の存在構造、特にメハニズムに就て（遺稿）

近藤 洋逸 近代数学の形成、その思想的背景

前川孫二郎 量子論と生物学

戸木田菊次 デジタルリスの研究、新強心配糖体デギコリンが完成する

〔講座〕

鮫島実三郎 膠質学について

〔書評〕

小沢 正元 古島敏雄著「家族形態と農業の発達」

谷山 徹 岡崎義恵著「文芸学」（長谷川泉）

（HI） 川並秀雄編「啄木晩年の社会思想」

〔学界時評〕

黒田 和夫・無機化学 中島 健一・理論生物学

森口 繁一・応用力学 水上 武・地震学

大山松次郎・電気工学 秋元寿恵夫・化学療法

北川 敏男・数理統計学 桧山 義夫・水産学

小川 芳樹・冶金学 中村誠太郎・素粒子論

季刊大学 第五号 （23・3・5）

☆特集・平和革命の具体的構想

藤田 敬三 中小工業の前途

木村和三郎 独立採算制度と企業会計の民主化

川崎巳三郎 安本経済政策の基本的性格

木下 彰 農業革命の展望、新農業協同組合運動を中心として

西沢 富夫 国家統制と国有化の諸問題、その歴史的意義

政経研究所編 国内経済グラフ

☆世界復興一カ年の回顧

前野 良・東欧

宮武 謹一・中国

清水三郎治・西欧

坂内 富雄・仏国

中林賢二郎・英国

世界経済研究所編 各国現状分析グラフ

☆座談会・近代理論経済学とマルクス経済学、理論と実践の関連に

ついて

(出席者)

司会・青山秀夫、大河内一夫、阪本弥三郎、杉本栄一、

安部隆一、豊崎 稔、新庄 博、木村和三郎(発言順)

石井 照久 戦後経済立法の動向

小林 良正 復興構想の貧困

安井 琢磨 アメリカ理論経済学の一考察、ケインズ革命と安定条件

駒井 和愛 登呂と最寄、登呂発掘の成果報告

渡辺 一夫 カトリシズムと僕

片山 敏彦 (詩) 或る序詩

☆地方文化ルポルタージュ

高橋 実 地方文化の現状分析

停滞と混迷を経て(河内光治)

中井 正一 地方文化の問題

☆討論会・X線照射による稲増収の実験について

(出席者)

司会・志村繁隆、早矢仕功、中泉正徳、村地孝一、

佐々木喬、西川五郎、川田信一郎、谷田沢道彦、竹中 要、石

川数雄(発言順)

[講座]

中村 哲 国家起源論

[書評]

中島 健 飯淵敬太郎著「日本信用体系前史」

(M) 法律雑誌評

(D・B)

「遙かな山(ヤマ)河に」「青春の歓びの中に―私の学生の頃・第

一集」

[学界時評]

高橋 義孝・文芸学

矢内原伊作・倫理学

佐木 秋夫・民族学

[文化時評]

永井 智雄・演劇

東大映画文化研究会・映画(佐々記)

美作 太郎・出版

土方 定一・美術

小田切秀雄・文学

(未完)